

海音寺潮五郎

海と風と虹と
二

と風と虹と

海音寺潮五郎

海と風と虹と 二

四八〇円

昭和五十年六月三十日 第一刷発行

昭和五十年十月一日 第三刷発行

著者 海音寺潮五郎

装幀 芹澤銈介

発行者 角田秀雄

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京・大阪・北九州・名古屋

© 1975 Chōgorō Kaionji

海と風と虹と
二

報告書

筏は岸につき、皆ひたひたと上陸した。

「それ！ ときをつくれい！」

將門のさしずとともに、皆どっとときをあげた。暗い夜空にひびいて、おびただしかったが、合わせる声はおこらなかった。

「すわこそ！ 敵は逃げにかかっているぞ！」

大音にさけんで、將門は真先かけて走り出した。

その頃から、空のどこやらにぼうと明りがさして来たが、やや濃い霧があつて、まことにもどかしい。

「走れ、走れ！ 逃がしてなろうか」

兵をわけて兩隊となし、左右から敵を挟みうちにするために走り出させた。

兩隊は走り出した。

霧のある暁の空に、將門の叱咤と、兵らの足音、草ずりや金具の触れて鳴る音がひびいた。しかし、敵の方では何の物音もない。

やはり、逃げられたのだ。方々に損傷して生々しい木口を見せている樹木があつたり、焚火のあとがあつたり、食器類が捨ててあつたりして、つい今し方までそこにいたことを語っていた。

將門はかっと逆上して、血走る目を海に向けた。あたりは一層明るくなつて来たが、海には霧がここ以上に濃くこめて、漠々と白いばかりだ。

やがて、その霧の中に、ぼうとあらわれて来たものがあった。はじめはあるかなきかに薄墨を点じたようであつたのが、次第に黒さを増して来て、舟であることがわかった。次々にあらわれて数十隻、ずらりと横にならんだかと思つと、どっと鬨をつくり、貝や陣鉦や太鼓を鳴らした。今にも攻め上つて来るかと思われた。

將門はあわてて兵をととのえた。戦う場をのこして、海べから少し引かせたのである。

海賊共は間においては鬨をつくり、鼓噪して、今にもおし上つて来るかのような勢いを見せて、その度にこちらを緊張させる。

からかっていることは、今は將門にもわかった。

「弓を貸して下されよ」

と、純友の弓を借りて、波打ちぎわに走って行き、引きかためて射放つたが、矢はとどかなかつた。

沖ではどっとあざ笑つた。

一矢だけで、かえつて来た。弓を返ししながら、

「まろが弓なら、とどかぬ矢頃ではありません。こんなことになろうとは思わず、持参しませんでした。かようなよしなきものなどをつくり、弓を持参しなんだとは、弓矢神に見はなされたのです」

と、いまいましげに言つて、背の手突矢を一筋とつて、へし折ろうとしたが、矢竹一ぱいに中子の通っている矢だ。折れる道理がない。一層いまいましげに、岩にたたきつけた。そのうち、賊の舟はしだいに明るさを増して来た中に、一きわ大きくさわいだ後、しだいにまたおぼろになつて、霧の中に消えてしまった。

からかわれたのであるとは思ふものの、そう見せて引返して来て不意を打つつもりかも知れないと、しばらくは緊張を解くことは出来なかった。

将門は齒ぎりして無念がった。

「まろを愚にしおつた。南海道の果まで来て、たかの知れた風賊共ふうぞくどもに、これほどの恥辱にあおうとは！」

と、涙をこぼさんばかりであつた。

純友は見るにしのびない。

「つらい、つらい」

とつぶやきながら、ひたすらに沖に目をそらして、霧を見ていた。

板島にまる二日滞陣した。そんなに長くいる必要はないのである。海賊らはもう散じ、それぞれの場所にかえり、再び引返して来はしないことは、純友にはよくわかつてゐる。しかし、将門が万一を期待して緊張をつづけているのを見ると、引上げようとは言いかねた。

将門はろくにものも言わない。島の最高所の岩に腰をか

け、きびしい目を海に向けつづけているのだ。そこに賊船のあらわれるのを期待して。

悲壮といえばかりなく悲壮、滑稽といえばこれまた無上に滑稽であつた。しかし、純友は滑稽とは思わない。

(つらい、つらい)

と思いつづけた。

兵らも、将門の悲壮な姿に打たれ、恐怖して、近くでは笑い声一つ立てるものはなかった。

三日目の朝、ついに将門は言つた。

「もはや、断念するほかはなくなりました。帰陣いたしましょう」

「そうですか。それでは、そうしましょう。思いもかけないこととなつて、本意ないことであります」

心でわびながら、純友は答えた。

帰りの途は長かつた。その長い途をかえって行きながらの二日目の野営の陣所で、将門は、

「中島にむかいたいと思います、ご同意下さらぬか」と言い出した。

こちらは急には返答が出来ない。

「中島に？ 何をしに？」

「申すまでもない。中島にいる賊共を伐つて、佐伯の殿らの弔い合戦をするのでござる。このままでは、何ともやるせ無うござる。ご同意いただきたい」

はげしい表情だ。

心を打たれたが、しずかに首をふった。

「ご同意いただけぬ？ まろのこの切ない心を、おわかり願えぬのか？」

「いや、いや、よくわかります。しかしながら、これこそほしいままに私兵を動かすにあたります。まろが国の守と介との差図を無視して、板島に向いましたのは、板島の賊の討伐は、故追捕使の殿からの命を受けて、すでに戦場に出ているにひとしいと判断したからであります。しかし、これから中島にまいるのは、それとは違います。私兵をほしいままに動かすにあたります。官人^{くわんじん}としては、筋道を乱すことは出来ません」

「賊を伐つのは国司の任務であるはず。当国の掾として、なさるべきことをなさるまでのことと、考えなさるわけにはまいりませんか」

「守と介とが不在であるとか、着任前であるとかであれば、まろ一人の判断でことを運んでよろしいが、今は守も介も在府しているのです。まろ一人の裁きでことを決することは出来ません」

将門は涙をこぼした。

「まろが武人としての面目は、ついにすたりました。京に帰っても、国に帰っても、世間に顔向けの出来ぬことになったのですぞ」

「お気持はまことによくわかります。しかし、そうまでつきつめてお考えになるのは、どうでしょうか。これはそこが責

任を負わなければならないことは一つもありません。海賊共は、その向われることを聞き、聞きおじして逃げ散ったのであります。どこにその名を落す^{おとし}ことがありましよう」

「言われな！ 追捕使の殿をはじめとして、京から随従して下つてまいった武者共は一人のこらず討死したのです。まろ一人が生きのこったのです。これが武人の恥でなくてはなりません」

ああ、そんな考え方もあったのかと、目からうる、この落ちる気持であつた。坂東の武人の心のきびしさが胸を打った。しかし、中島などに押寄せては、番狂わせだ。なんとしても、ここはなだめつけなければならぬ。

「事情さえよくわかれば、誰が何と思ひましよう。国府としても、こんどのことは、くわしい報告書を出さなければなりません。そのことをよく説明します。従つて、朝廷からもそこには何のおとがめはないはずで、世間もわかつてくれるはずであります。お心安くおわけせよ」

「世の人の一人一人に、一々言訳をせよと仰せられるのか！ われらの国の習いではありません。いや、さやうなことが出来ることとお思ひか！」

将門はまた涙を流して、いきり立った。

あたかもその時、国府からの使いが来て、守と介連署の符をとどけた。二人は純友がこの前の符を無視して、なかなか帰って来ないのを怒っていた。こんどこそすぐ帰らないなら、京へ上申して処罰を申しつけると、大へんなけん

まくであつた。

純友にとっては、助け舟であつた。

「この通りであります」

と、将門に見せた。

将門は見ても、黙つてかえした。もう何にも言わない。むずと口を引きむすび、灯台の灯を凝視していた。

国府に帰った。

守も介も、はなはだきげんが悪い。

純友は、すでに佐伯追捕使の命を受けて板島に向いつつある以上、すでに戦場にあると同然であるから、決してほしいままな戦さをしているのではないと判断したのであると弁解したが、二人は納得しない。なおくどくどと言いつのつた。

こんな手合には、純理論ではだめであることを、純友はよく知っている。官人というものは、自己保全と自らの出世とだけでものごとを考えるもので、従つてこれを説得するには、この彼らの目的を官制と官規とに合致させる特別な論理をもつて合理化してみせるのが唯一絶対の道であることを、経験上、純友はよく知っている。そこで、その手をもつてする。

「仰せられること、一応道理ではありますが、中島において追捕使の殿をはじめとして、京から下つてまいられた方が一人のこらず戦死なさつたのに、当局が何ごともなし

得ないとすれば、朝廷の思し召しはいかがでございましょうか。

ともかくも、追捕使の殿のご軍配によつてつかわされた武者衆の一人を奉じて、まろが板島に向い、そこにこもる賊を追いはらつたことは、一つの功績であります。当府の面おこしになる唯一の功績であります。これあるがために、朝廷では必ず心をなだめられるに相違ありません。それどころか、功績として、守の殿にも、介の殿にも、不当にも、ご褒詞あることと存じます」

二人はだまつた。

純友はもう一押しした。

「もし、反対に、これすらなくば、必ずお咎めを蒙るは必定でありましょう。まろはたかが豫のことでありますれば、なにごともありますまいが、かような時には上位の人ほどあぶない。雷は高い木に落ちるものであります。守の殿、介の殿は雲居に近くそばびえておわせば、どうなりますことかしら二人は顔色をかえた。

さらにもう一押しする。

「ご理解いただいて、おゆるされをいただけますなら、朝廷への報告書は、まろが書きましよう。いかが」

二人はもう何にも言えない。万事、純友にまかせることになった。

純友は退つて、報告書を草した。

中島に行きむかつた佐伯追捕使らが花々しい大奮戦の末

戦死したと書いた。奇計におちいって何のしでかしたこともなく討取られたことは書かなかった。徵募兵らが全員助かったことも書かなかった。半数ほどが目の漢部倉麻呂とともに奮戦して死んだことにした。追捕使の差図を受けた平将門は、守と介とが合議の上随従させることにした。據の藤原純友とその手兵とをひきいて、中島の賊と呼応して板島にこもる賊の討伐に行きむかった。賊が舟をとりおさめて、附近数里にわたる海辺には小舟一隻なかった。終夜かかって筏十台を組み上げ、それに乗って払曉とともにおしよせたところ、不意を打たれた賊共は一戦にも及ばず、潰走四散した。将門の豪勇は真に驚嘆すべきものがあつた。逃げる敵に向つて、この人独特の武器である手突矢をなげうったところ、十数間もはなれていたのに、その敵の背負っている厚い楯をつらぬきその賊をたおした。それは賊の魁首の一人であつたので、賊共が死骸を負うて逃げたため、残念ながら首をあげることは出来なかつたが、まことに舌を巻くばかりの猛勇で、後世の語りぐさになるであろう、というようなことを書きつらねた。

草稿が出来て、守と介とに見せると、二人とも大満足であつた。

「守と介とが合議の上、そこを随従させることにしたといふところ、別してよう出来ている。三人ながら功績のあることになる。司馬相如の筆にひとしい」

などという。司馬相如の文章など読んだこともないくせ

に。

書生に浄書させて、すぐ差立てることにした。

将門は憂鬱な日を送っていた。守も介も、将門にはもう会いもしない。公式には、将門らの武者は佐伯追捕使が自分だけの考えで連れて来たのである、追捕使が死んだ以上、ただの坂東武者にすぎない、会う必要はない、まして歓待しなればならない必要などさらないという論理である。

(奇妙な世界の人々じゃわ)

と、純友は苦笑も出ない。ひとりで、何くれとなく心をくだいて歓待した。

その将門も便船があつて、帰京することになった。

純友はクグツ男を呼出して、大浦に使いを立てて、中島に連絡して、帰路を安全にしてくれるように頼んでやつた。「承知いたしました。すぐに連絡します。ご安心あつてしかるべし」

と、留守居の者から返答があつた。

いよいよ船の出る前夜、別宴を張った。

かなり飲んでも、将門の気持は浮かない。

やがて、

「まろはもはや、京にとどまることは出来ないでありますよう。国に帰りたいと思います」

と言った。

「そのことは、朝廷への報告書の中に、かくかく書いておきましたから、決してご名譽にかかわるようなことはな

いでありましょう。あるいはご褒詞くらいあるだろうと思います。しかし、それでも、国にお帰りになるとは、よいご恩案であります。いつぞや、まろは京でそこに、この世は必ず近々に大変化するであろうと申しましたが、今もまろはあの考えを改めることが出来ません。必ず大へんな変りを見せます。そうなつては、今の朝廷の官位など、なんになりましょう。帰国なさりたいとは、よいご分別であります。必ず帰国なされよ」

と、純友は力をこめて言った。

「そうします。必ずそうします」

将門の返事にも力がこもった。

船は翌朝、日の出る前に出た。純友は港まで見送った。

よく晴れて、小寒い風の少しある日であった。

白い雲の浮いた空の下、さざ波立つ青黒い海の上を、

帆が小さくなるまで、見送っていた。

(さあ、どうなるか。おれの思った通りになるか、種子は

十分に蒔かれたはずだが……)

群盜横行

将門の帰京を送って数日すると、クグツ男らが二人そろつて来た。

「ご用相済みのようでごわりますけ、手前ども、お暇いた

だきとうごわります」

という。

ずいぶん長逗留になったが、皆こちらの用事のためだ。十分に礼をして、帰ってもらうことにした。ついでに、武蔵をはじめとして、京の女どもに便りと金銀をとどけてもらうことにした。

宛先を間違えたらずいぶん大変な騒ぎになるであろうなと思つたら、ついにやにやと頬がゆるんだ。

「間違うなよ。間違つたら大事だぞ。その方共、顔中みみずばれが出来るぞ」

「へへへ、心得ています」

と、クグツらも笑った。

武蔵にあてた便りには、小一条院に恪勤している坂東武者で平将門という人物がいるが、この武者のことを時々知らせてくれるようにと書いた。将門は国に帰るとは言つたが、官位をもらえば、いや、そうでなくても、好きな女でも出来れば帰るつもりでいても帰れなくなる。もしそんなことになったら、帰るように手を工夫しなければならぬと思うからであった。

何ごともなく年は暮れて、新しい年が来た。海賊らは依然島々に蟠踞しているが、伊予の国人には全然害をしないのである。

板島に拠つて附近いく里かにわたつて海岸線を荒したというのも、すんでみれば、全部で十数軒の民家を焼いたに

すぎず、どうしてあんなすさまじい評判が立ったかと、皆おどろいているのである。もつとも、被害甚大に報告しておいた方が、掃蕩の功は高く買われるから、朝廷へ訂正の報告はしなかった。

春もすっかり闌けて、あたにかいこの国ではもう夏と言つてもよい頃になって、国ノ守以下の人にたいする朝廷の褒詞がとどいた。守や介や純友には海賊討平の功を賞し、漢部ノ目にはその死を悼んで、位一級を進めるといふのである。将門のことは、官符を持って来た者から聞いた。将門は官職がないから、朝廷の褒詞はいただけなかったが、京中の人こそつてその武勇のほどをたたえているから、間近くせまっている除目できっと任官するだろうと言われていた。

守と介のよろこびは言うまでもない。純友は覚え太いにめでたくなつた。もつとも、前から覚えはよいのである。二人はおたがい同士は不和であるが、純友にはいずれもよいのである。しごとがよく出来る上に、吝まらずものをくれるからである。官人というやつは、上は大臣諸公から下は史生・書生の末に至るまで、金銀、その他の財宝をやりさえすれば、兎の片足をもらった獺犬のようにごきげんなのであるとは、純友の信じて疑わない官人哲学である。

〔万事予想の通りに行つたわけだが、将門が任官するのはこまつたな。官づきなどしては、せつかくいや氣のさしている京にまた未練が出て来よう。少々薬がききすぎたわけ

だが、そうきつちりと行きかねるのでなあ……〕と、苦笑した。

しばらくして武蔵の書面を持って、またクグツ男が来た。「おお、その方がまた来てくれたか」

とねぎらうと、

「誰かれとおさがしになるより、手前がまいりましょうと、買って出たのでござります」

と相手は笑つた。

武蔵の手紙には心のたけをこまごまと書きつらねてある。会っている時は少しも愚痴っぽいところはない女だが、遠く離れているといろいろ物思うことが多いのであらう、綿々とつらねてある。

〔何とかして用事をこしらえて、行つてやらねばならんような〕

と思つた。

将門のことは、末尾にちよほつと書いてある。

三月半ば、国に帰って行かれた由。急な思い立ちであつた模様で、朋輩衆も、小一条院でも、おどろいていゝるという。

とあつた。

「三月半ばか」

と、純友はつぶやいた。毎年三月になつてすぐ京司の

除目がある。恐らく將門は世間のうわさもあり、今年こそはと希望をつないでいたのであらうに、また無視されたので、一時に望郷の思いが切になり、大急ぎで帰国したものと解釈された。

滞京数年の勤仕も、費した財宝もずいぶんなものであったらうに、無位無官のまま国に帰って行ったことを思うと気の毒ではあったが、大いに安心であった。彼の胸の底に蒔いた種子が、坂東の沃野でどう根つき、どう芽をふいて行くか、なかなか楽しみであった。

またしばらくして、朝廷から符が来て純友を京に召した。海賊のことについて聴きたいことがあるというのである。

海賊追捕使として派遣した佐伯清辰が随兵らとともに全滅したのは、よほど大勢の賊共と見て、将来のためにくわしく知りたいからであるに相違なかった。

(なるほど、藤原純友という伊予掾は本来伊予の住人である上に、この前は海賊征伐に功を立てた経歴もあるので、当代屈指の海賊通ということになったのじゃな)

と、人事のことにように考えて、おかしかった。朝命だから、官人として拒絶することは出来ない。

(ともあれ、久方ぶりに京上りするも面白からう、さぞ、武蔵がよろこぶことであらう)

五月半ば、途に上った。海賊らに連絡をつけて途中安全の保障をとりつけてからであることは言うまでもない。

京へついたのが六月半ばであった。今の暦なら七月半ば、暑いさかりである。

普通なら、妻の実家である賀茂直世の宅に落ちつくべきだが、そうしては自由な動きが出来ない。船が大物の浦に入るとすぐ、宿をととのえるために、郎党を上陸させて京に急行させた。

色々めんどうだから、賀茂家にもどこにも、上京のことは知らせてやらなかった。もつとも、賀茂家は大姫の賀である太政官小史の伴ノ石麻呂を通じて、近々に上京するということだけは知っているであらうが。

その後も、泊り泊りで遊女あそびなどしながら、ことさらゆっくりと川をさかのぼった。

鳥羽についてみると、郎党が出迎えていて、

「お宿もとは東山三条にしつらえました。小一条院の家人で、今国ノ守となつて三河へ行っている人の宅でございませう」と言った。

「ほう、それはまた便利なところにさがしたな。あつぱれな働きだぞ」

とほめてやった。

東山三条なら、武蔵のかくれ家にも近い。満足であった。

そこへ落ちついたのは、もう夕方であったが、その夜すぐ、栗丸一人を供に連れて、武蔵のかくれがに向つた。

満月少し前の月が半分ばかり上っている夜である。涼し

い風がそよ吹いて、昏間の暑さはもうなくなっていた。暖道なみちを行きつくし、東山の麓ふもとをめぐっている道をぐねぐねと曲りながらたどって、やがて谷間に入り、細い道のはてその家についた。

純友は谷間の小径こみちの出口にしばらくたたずんで、その家の灯影を見ていたが、やがて栗丸に、

「そちは帰って、明朝迎えにまいれ」

といって、持たせて来た土産物の包みを受取った。

「明朝なん時頃にまいりますべや」

「六つ時でよい」

「六つ時でござりますの。そんだら、うらは帰りますべ」
木の間をもれる月の光が斑まだらになってこぼれている径みちを、

軽い足音とともに立去った。

純友は、その家の灯影に、武蔵一人ではないけはいを感じたのであった。

栗丸が遠く去ったのをはかつて、ぐるっとまわって南庭の方に出了た。庭のこちらの端に立って母屋の灯を凝視した。

家は扉しきりを開けはなし、開けたそこから蚊遣かきの煙がゆるやかに這い出し、月の光にぶく光っている軒からみながら立ちのぼっている。夏の宵らしく、いかにも開放的ではあるが、人は屋内深くにいるので、この距離からこうして見ているのでは、よくわからないのである。しかし、武蔵一人でないことは確かである。

(この隠れが知っている者は多くはない。先ずまろ、次

に度々使いに来たクグツはもちろん知っていよう。その他には——たしか手下共も知らないはずだ。何かの用のある時は、暗号あんごうによって、どこかよそで会うことにしていたはずだ……)

と、思った時、これは情夫おとこではないかという疑惑が忽然として湧きおこった。

胸が波立って来た。

女共に裏切られたことは、これまででもずいぶんあった。国許にかえって京を不在ふりにしている間、生活の資を豊かに送りつづけていたのに、三年経って上京してみたら、ほとんど全部誘いざなう水にただよわされて、よその花になっていた。何ともはや歩あどまりの悪いものかと思つたのだ。しかし、その中で武蔵だけはそうでなかった。ちゃんと自らを守りとおして、自分を待っていた。

それだけに、いとしさも一入ひとしほなのだが、一方から考えると、人間の心ほど不安定なものはない。

ついこの前、クグツ男に持たせて伊予によこした文は、切々たる慕情あふれたものであったが、その後どう心が変わったかわからない。心は変らずとも、男女の間というものは、蓮の葉にたまっている夕立の後の露とかわりはない。心や精神などの伴ともないがなくても、そよ吹く風の機縁で、ほろりとまろび合って一つになり勝ちなのだ。まろび合えば、しぜんそこに情が湧き、その以前の恋情は忘れられて行くのが常だ。

そうだったとて、腹を立てるようなことはしたくない。恋情は歲月と同じだ。ひとたび過ぎて行けば、絶対に引きもどきは出来ないものと、純友は考えている。

（行くものは行かしめよ。追う愚はしたくない）

と思うのだが、それにしても、武蔵が新しい情人と二人いるところに、不用意にふみこんで行くのはいやであった。あれこれと気をもみながら、人目をしのお姿で、こうして凝視しているのが、何かみじめな気がして来た。

「ばかげとるわ！」

声に出してつぶやくと、にやにやと笑えて来た。

いきなり、右手の小指を曲げて口にふくんだ。強く吹いた。ヒュー、ヒュー、と、強くするどい音が二声立った。

すると、灯影がゆらめいて、その灯をもつて、奥から出て来た人影があった。二人である。部の間を出て、實子に立って、こちらを凝視している。一人は武蔵であることは間違いない。一人は、男だ。たくましい、長身な男だ。しかし、誰であるかわからない。

純友は庭を真直ぐに横切つて、すたすたと進むうちに、それが誰であるかがわかった。

「やあ、これは、これも、思いもかけず」

と、純友はさげんだ。

左獄の看督長藤原季重は、にやにやと笑った。

「ところが、まろの方では思いもかけずではないのです

ぞ。大方、明日にはお出でになるであらうと、お待ちしていたのです」

「それはまた、どうして？」

「まあ、お上り下さい。話はくつろいでいたしましょう」上った。

人里離れた場所ではあるが、用心のために家の奥で対坐する。

季重は、持前の血色のよい、いかにも精気のみなぎり切った感じの顔に、おちつきはらった微笑を浮べているが、武蔵はそうでない。酒の支度のためにたえず動いているが、その細おもての華奢な顔は、ひっきりなしに紅くなったり青くなったりしていた。うれしいあまりの興奮に、わくわくしているに相違なかった。

純友は、つい今し方まで武蔵のことに疑惑を持ったことなど、まるで忘れていた。ひたすらな愛情が胸にたかまっていた。

男同士の間には酒がはじまって、互いにほろほろと微醺がまぶたに上つて来る頃、武蔵もやっと落ちついてすわった。いろいろな話が出た。まず季重は、純友がごく近々に来ることを、伴ノ石麻呂に聞いたといった。

「なるほど、あの殿は太政官の小史であり、使庁の別当中納言豊郷卿の家扶でもありますな」

と、純友は合点した。

純友が海賊の話や、こんど上京して来た用件などについ

て語ると、季重はこの頃の京の治安について物語った。

「当地の治安は益々險悪になります。一人二人でする、引剱ひきかぎぎ、窃盜せつとう、押込などは連日ないことがありません。時には数件もあります。その上、近頃は強盜らが集団化する傾きがあります。左獄は目下その盜賊共で一ぱいで、何ともやりくりの出来ない状態です」

それに関係があるのか、という意味をこめて武藏を見た。武藏は微笑した。涼しげな笑顔はそうでないかと答えていた。

「海だけかと思ったら、陸おかもですな」

と、純友が笑うと、季重も笑った。

「しかもですぞ、その群盜共が卑賤な者ばかりではなく、ずいぶん高貴な家の子弟が多い。おどろくべきことです。宮家の王みみやうもいる。公卿くしやう、殿上人の子弟もいる」

笑って言い出したのが、いまいまだに顔になっていた。「ほう！」

こちらはあつげにとられていた。

季重は調子をかえた。

「椽えんの殿は、式部大輔であつた藤原菅根すがねというお人をご存じですか」

「知っています。雷かみなりに蹴殺されて死んだというあの人であります」

藤原菅根は菅原道真の門弟として、はじめ学問によって身を立てた人物であるが、後に道真の敵である本院のおとど藤原時平の子分となった。道真が失脚して筑紫に左遷さ

れることになった時、宇多上皇は道真を救おうとして、醍醐天皇のところへお出でになったところ、菅根が門を守っていて、お通し申さなかった。道真はこれを怨み、死後、雷かみなりとなって、菅根を蹴殺したと伝えられているのであった。その頃有名な話であつた。

季重は言う。

「つい数日前のことです。その菅根卿の旧宅に、三十数名の盜賊共がおしこみましてね。近所の者共が逸早く届けましたので、使庁から檢非違使けんびゐし、諸衛府の者、諸家の舍人とねりなど、それぞれに馳せ集り、取巻きましたところ、盜賊共は矢を射放ち、終夜手強てつやうく抵抗しては、すきを見て逃れようとしてました。しかし、そのうち夜が明けてまいりましたので、とうてい逃れることが出来ないと見て、弓矢をさし出して、降伏しました。三十六人もの大人数なのです。左獄はそうでなくとも囚人が多いのに、もうぎちぎちでね。これからどうなることかと、心配です。まさに、群盜横行です。ハハ、ハハ」

「しかも、しかも、ですぞ、おどろくべきは、その群盜共の本来の身分ですよ」

落日の象徴

式部大輔故藤原菅根卿の旧宅で、檢非違使らに降伏した

群盗らの本来の身分がおどろくべきものであると、藤原季重に言われた時、純友はすぐ見當がついた。

「公家のご子息ですな。あるいは若い公家衆自身もまじってお出でかも知れませんな。いかが」

と言うと、季重はおどろいた。

「ほう。どうしてそれをご存じです。誰ぞにお聞きになったのですか」

純友は笑った。

「いやいや、カンですよ。まろは奇妙にこうしたカンは鋭いのです」

「仰せられる通りなのです。多くは公家の子弟で、うち二人は現職の官人なのです。王もいます」

季重はその人々の名を列挙した。その中のいく人かの父や祖父は純友の面識のある人々であった。覚えす嘆息した。「おどろかれたでしょう。これが当今の京というところですよ」

「それでその人々はどうなりました」

「嚴重に左獄に禁錮という名目になっていますが、何せ名流の人々の子弟ですので、有力な手筋をたぐって色々と運動がありまして、規則通りには行いかねて、食べものも、夜のものも、差入れられた結構なものをういて、大いに気楽にやっています。まろとしては、職責上、腹の立つこと一方ではありませんが、万事許容するよりほかはないのです。やがて事件もうやむやにもみ消され、賊徒一同、最も

軽い処分で放免されるに相違ありません。一体、何のための官なのでありましょうな」

季重は慷慨にたえない様子であったが、ふと皮肉な顔になった。

「ハハ、まろはこんなことをいきどおる資格はないのです。まろは決して忠誠にして実直な官人ではないのですから」

自嘲するような微笑がその顔にある。純友にたいする友情のために、武蔵を首領とする賊徒らの便宜をはかっていることを言ったのである。

純友は首を振った。

「いやいや、下民の盜賊働きには、道理があります。彼らは彼らが先祖代々營々として働きつづけて美地とした土地を、権門・勢家に横奪されたために、流民と化したのです。彼らが奪われたものを取返そうとするのは道理です。他に方法がないから、暴をもつて暴にかえて、盜賊行為によらざるを得ないのです。満ち足りた生活の出来る公家やその子弟らが、いやが上にも享樂をもとめるために他から横奪するのと、同一にしてはなりません。冒瀆です。——そうでしょう、武蔵の君」

と、ふりかえった。

「まろはむずかしいことはわかりません」

とだけ、武蔵は答えた。白い顔に、ほんのりと酒気が上っていた。